

諸産業の発達（捕鯨）



* 旧藩別置記録 風土注進案350「通浦」

解説

捕鯨は、山口県の北浦沿岸でも古くから行われていました。江戸時代には網を用いてクジラを拘束して錨（もり）で仕留める「網取り式」とよばれる技術が開発され、対象の鯨の種類も増えました。写真は、網をかけたセミクジラを錨で弱らせて捕っているところです。

捕獲された鯨からは肉のほか鯨油が生産され、ヒゲも様々な工芸品の材料として使用されました。

とりわけ鯨油の害虫駆除材としての用途は重要で、水田に流して油膜をつくり、そこへウンカなどの害虫を叩き落として窒息させました。さまざまな油が用いられましたが、江戸時代の農書である大蔵永常の「除蝗録（じょこうろく）」には、鯨油が最適であると記されています。虫除けは農家にとって重大な関心事でした。

* 旧藩別置記録 風土注進案343「向津具（むかつく）村」にも川尻浦での捕鯨を描いた捕鯨図があります。注進案の時代、川尻浦の鯨組は22艘の船からなり、鯨を包囲する網を積む「惣階（そうかい）船」、鯨を網に追い込み、錨で突いて仕留める刃刺（はざし）が乗る「追船」、仕留めた鯨を抱いて浜へ運ぶ「持双（もっそう）船」のほか、網縄船、魚見小屋などが描かれています。